

団体の、活動ノウハウを公開する

活動 なう

[第1回]



蒲生さん(左から3人目)とスタッフの皆さん

蒲生 哲さんのプロフィール

昭和38年生まれ。陸前高田市広田町出身。震災以前はモビリアキャンプ場の支配人をしていた。現在はそのキャンプ場を拠点にして特定非営利活動法人「陸前たがだ八起プロジェクト」理事・事務局長として復興支援に力を注いでいる。

被災者の“思い”に寄り添う 「NPO法人 陸前たがだ八起プロジェクト」

理事・蒲生 哲さん



組織はこうして立ち上がった

私は、14年間このオートキャンプ場モビリアの支配人をしており、昨年3月11日の東日本大震災のあり、市内が一望出来る施設内の展望台で、午後3時から夕方6時まで茫然と立ち尽くした。目の前で街が消え、目の前の7万本の松が一気に消え、目の前で2千人が亡くなる姿を見てしまった。ここは高台になっていて、気がついたら300人ほど集まっていた。ここは避難所ではなかったが、この人達を何とかしなくてははいけないと思ひ、独断でここに避難所を開設した。



▲NPO法人設立を記念して行われた大だるま絵かき

陸前たがだ八起プロジェクトの支援

6月下旬頃、避難してきた人達がこの避難所から仮設住宅(168世帯380人)に移ったので一段落したんだなと思っていた。ところが、中越防災安全推進機構から、「蒲生さんこれからはだよ。」と言われ、その時は意味が分からなかった。仮設住宅に入居して皆さんそれぞれプライバシーは守られるけれども、この人達はいずれ本設に移る。その人達が仮設住宅において、どのように過ごしたかが今後重要になる。関々と過ごすのか、「やりがい」や「生きがい」を見つけて、ステップアップして本設に移るかで、全然違うということだった。そこで、我々はNPO法人を立ち上げ、仮設住宅支援や自治会をサポートすることとした。実際、自治会長はすごい苦労をされており、例えば、物資を頂くのは有難いので、自治会全員分まとめて置いていける状況だったので、自治会長が一人で分配している状況だった。そこには、不平や不満が当然出て来ってしまう。また、仮設住宅には救済物資を支援し易いため、仮設住宅への支援が主になってしまったことから、在宅避難者と仮設住宅生活者との間で、食料分配などで溝が出来てしまっていた。どちらも被災者に変わりはないが、仮設の人達から見ると、在宅避難者は家があるから良いじゃないかと感じてしまう。被災後間もない頃は、家がある人達は、炊き出しなどをして、仮設の人達を助けた頑強な繋がりがあったが、仮設暮らしになってからは、そのコミュニティが崩れつつあるのは残念だ。私達は、3、11以来コミュニティに助けられてきたのだと強く思っている。

地域の住民を主体にして

全国、全世界から支援の手が差し伸べ

今後へ向けての抱負

最初、私達はここにいる人達の「生きがい」作りや「やりがい」作りに向けてやって行こうとこのNPOを立ち上げたが、1年経って、先のことが見える人はいいが、見えない人もいる。今ある支援はこれで良いのか悪いのか、何のためか誰のためか、じっと静かにしていきたい人もいるし、イベントの開催も含めこちらから色々提案して、皆さんを巻き込んで、自分の力で働いてお金を稼ぎ、そのお金でご飯を食ったり遊びにも行く、そういった普通の生活に早く戻りたい。

私の目の前で、2千人もの尊い命が理不尽にも奪われたが、起こってしまったことはしょうがない。それよりも、亡くなった仏様達のためにも震災前よりも良い街にしなければならぬし、私達の子供や孫が、陸前高田から巣立ったとき、「あの悲惨な陸前高田から来たの、大変だったね。」と慰められるよりも、「あの状態から立ち直った陸前高田から来たの、すごいね。」って言われるように、子供達や孫達が誇りを持てるような街を創ることが、残された者の役目だろうと思っている。

られた訳だが、三陸沿岸の被災地にとっては自分達で何とか出来るレベルではない。今は有難く支援を受けているが、永遠に支援を頂ける訳でもなく、いずれは残った地元人間が立ち上がり、自らやっていたいかなければならない。そう言った意味でも、地元人間が立ち上がった意義は大きいのではないか。



▲モビリア仮設住民と新潟県山古志村へ視察

避難所について

当初は、避難所のコミュニティはしっかりしていた。多くは地元の小友地区やその周辺の人達であり、コミュニティがまとまっており、どの避難所に比べても避難している人々の間には衝突がなかったと思う。なお、このキャンプ場にはマット、シュラフ、ランタン、水等があり、他の避難所よりも恵まれていたことは幸いだった。

仮設住宅の建設地として キャンプ場を利用した経緯

陸前高田市では、被災地域が大き過ぎたため、仮設住宅を建てる場所がほとんど無い。一番被害を被ったのは学校のグラウンドであった。やむを得ないことだが、子供達が運動できないという2次的

被害が出ている。そのような状況下で、このキャンプ場は、全国に10箇所しかない5つ星の高規格になっており、キャンプサイトには、一区画ずつ、電源と上下水道が完備しており、上物さえあればそのまま利用できるため、迅速な対応が出来た。

仮設住宅者のイベントについて

一番盛り上がるのは、おばあちゃん達による踊り。今まで寝たかと思ったら、目を爛々とさせて元気に立ち上がり、「高田音頭」であったり、子供達も参加して色々な踊りを楽しそうに踊っている。その他、老若男女が一緒になって、四季折々の行事をしている。与えるだけの能動的イベントよりも、自発的なイベントを私達は目指している。自分達で何か、やりがいや生きがいを見つけてやるのは大事なことです。例えば縫物サークル、お菓子作り、そば作り等、あくまでも自分達でやりたいことを見つけて作る機会を作って頂きたい。

行政及び地域との連携について

もちろん市役所職員は頑張ってくれているが、職員の3分の1が亡くなっているため、一関市などから応援部隊にも来てもらっているが、残念ながら行政とはあまり連携はとれていないのが現状だ。地域には、回覧板やチラシによる告知を行っているが、この仮設住宅はすごく広く、告知すること自体がネックになっている。住宅内から全然外へ出ない人もいるし、被災してから今まで、あっという間に時間が経過したので、少しゆとり時間を使って考えたい、周りとは関わりたくないという人もたくさんいる。

現在抱えている課題

NPOという言葉すら知らない中で、私達の存在や活動を皆さんに知ってもらうのには一苦労した。中でも、「カネ」や「ヒト」を集めることが大変だった。95%助成金で運営しているが、資金が無いと人を集めることも出来ないの、そこが辛いところである。

生業の収入確保の活動について

日中、若い人は仮設住宅には居ないが、仕事をしているかどうかは分からない。なぜなら仕事はここには無いから。職安にも求人案件は出ているが、結局期限付きとか、社会保険を完備してないとか、職安の方も苦労している。私自身も生業が無い。やはり、生業についてはかなり厳しいのが現状である。



1月ミズキ園子作り

正月の餅つき



特定非営利活動法人 陸前たがだ八起プロジェクト

住所：〒029-2207
岩手県陸前高田市小友町
字瀬沢 155-78
モビリア仮設住宅内
TEL：0192-56-4111
FAX：0192-56-4111
E-Mail:rt8kjp@gmail.com